ＣＬＰ導入にむけて

国際ロータリー第2510地区
2010−2011年度 ガバナー　佐々木正丞
（札幌RC）

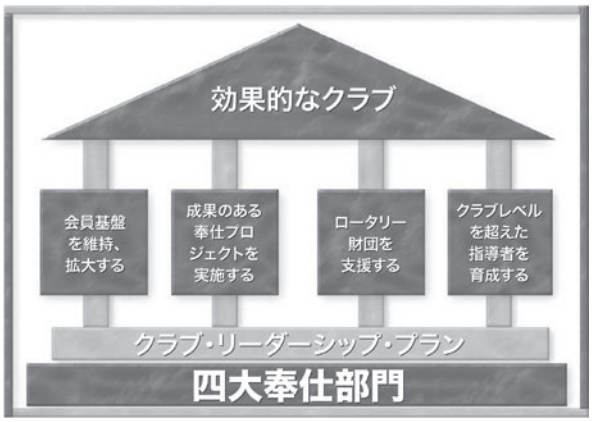
ＣＬＰ（略称）がＲＩ理事会で承認され、新たに推奨クラブ細則となったのは、今から６年少々前の2004年11月のことであります。もっともＤＬＰはそれより早く、色々な経過を辿って2002年２月にはロータリー章典に明文化され、義務化されております。

ロータリーがポール・ハリス等４名によってシカゴで産声をあげてから100年に近づく頃から、改革の声は様々な方面から上がっておりましたが、ロータリーがもっとも顕著に世界的なテーマに乗り出したのは、ポリオとの戦いであり、これ１本に殆ど絞ったと言っても過言ではありません。なお、日本人の力が大きく影響を及ぼしたということは12月号の月信に述べた通りであります。

次に改革の議論を収斂させたのが、先述のいわゆるクラブ・リーダーシップ・プランであります。

今日、ロータリーの文書・書籍は全てＣＬＰを前提として記述されていますので、我が地区がこれに周回遅れになっておりますのは、甚だ気がかりなところであります。私はこのことを公式訪問で全ロータリアンに訴えましたが、当初の頃から見ますと反応は非常に前向きになって参りました。

私はＣＬＰの具体的な形については殆ど話しませんでしたが、強調したのはＣＬＰ導入検討プロジェクトチームを地区に設置しましたので、ここと連携をとって下さいということと、力を込めて言ったのは「何故、今、ＣＬＰか」ということでありました。ロータリーは100年も経つがこの間、ＲＩが手を加えたのは弥縫策とでもいうべきことだけでした。我が国日本ではこのところ、ロータリーの勢いは急落しております。経済力や人口の減少だけでは説明のできない萎縮、凋落ぶりです。何故でしょうか？　ＣＬＰによってクラブの活動（ロータリー活動 イコール クラブ活動）をどのように建て直すか、どう活を入れるか。このことを議論することこそが正に今、私の言うＣＬＰ活動であります。それは、誰の命令でもない、誰にも拘束されない、自らのリーダーシップによって取り組むべきものであります。ＲＩの資料に傘をかぶった４つの箱（管理運営の組織図）があります。そもそもこの箱が我が国のように原理的に古来からの伝統的なロータリーの奉仕哲学を尊重するロータリアンにとっては、誤解を生み、不可解な疑念を与えることになったのも当然でありましょう。ＲＩは、哲学は勿論重んじますが、多くの人の意見に絶えず気を配ります。あの箱は、ロータリアン何千人からアンケートをとって「消滅したクラブ、弱いクラブ」の原因は何か、を調べたときの中味なのであります。皆様のクラブに「自分のクラブにはその問題はない」とおっしゃればそれは無用のものであります。



日本で、いや当2510地区ではＣＬＰの考え方が普及しなかったのは、「誤解」が大きな原因と考えております。箱の話が先にくるのではありません。職業人の代表者組織の頭の中に職業奉仕が抜けている筈がありません。次回では、「そもそも」のところからお話を申し上げたいと思います。